
計画的レンアイ

masaki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

計画的レンアイ

【Nコード】

N0540Y

【作者名】

masaki

【あらすじ】

高校2年生の紗和は、幼馴染である嘉月に昔から勉強で勝ちたいと思っているが、今まで一度も勝ったことがない。そして、何かとちょっとした掛けを掛けてからかう嘉月を紗和は嫌っている。

いつもは紗和がテストの勝負を挑むが、なぜか急に嘉月が「勝負をしよう」と言いだす。ただし、勝負に勝った方が命令できるという賭け付きで…。

紗和は今度こそは勝って、嘉月を下僕扱いしてやろうと、その勝負と賭けをすることにする。しかし、その裏には紗和が想像もしない

ような、嘉月の巧妙な罠が仕掛けられていた…。

“ 確実に手に入れるためには、恋愛も計画的にするべきでしょう？”

美形幼馴染の攻めに、うぶな主人公はどう対処していくのか！？甘い初恋に少しの笑いを入れた、超王道な恋愛作品です。

※批難や中傷といった書き込みはご遠慮ください。

第1話 完璧な幼馴染

「いやいやいや…。それはないでしょ…?」

先ほど廊下に張り出された“第2学年2学期 中間考査 結果発表”を見て、
一人つぶやく。

成績が良い上位20名の名前が挙げられているその紙には、自分の名前、
結城紗和（ゆうきさわ）が“第2位”に表記されている。

学年全体で200人弱いる中の2位なのだから、普通はもっと喜んでもいいはずである。
普通なら…。

しかし、紗和は自分の順位よりも上…、
“第1位”に名前が挙がっているそのいつのことで頭が一杯だった。

「いつもいつもいつも…、私の邪魔ばっかりしやがって…!!」

紗和が見つめる視線の先には“第1位 進藤嘉月（しんどうかづき）”と、
でかでかと書かれた名前があった…。

紗和が一番嫌いな男……。

「紗和ちゃん！どうだった？」

廊下を走りながら、友達の仲村香代子（なかむらかよこ）が近寄ってきた。

「こら。廊下は走らないの！滑ったら危ないでしょうが。」

「紗和ちゃん、先生みたい。」

香代子は紗和よりも少し背が高い。

紗和が単に小さいだけなのかもしれないが…。

「ねえ、それより結果…。」

「聞かないで！そっとしておいて！！」

まだ、絶賛ショック中なのだ。

これ以上傷をえぐらないでほしい。

香代子は結果発表の紙を見て、「ああ…。」と納得する。

「また、だめだったのね…。」

「“また”って言わないでっ！…まただけど。」

そう。

またなのだ。

一体、17年の間に、何回こんな屈辱的な思いをしてきただろうか

…。

必ず、自分よりも上にいる男。

今回こそは蹴落としてやるつもりだったのに…。

「目障りな奴だわ!!」

「誰が？」

耳元でささやく声…。

振り返ると、そこには満面の笑みをたたえた、
今紗和が一番会いたくないやつがいた。

「耳元で話しかけるなって、何度言ったらわかるのよ! 嘉月!!」

「紗和…。怒ったらせつかくの可愛い顔が台無しだよ?」

進藤嘉月。

いいかげん、その顔と名前には見飽きている。

「うるさい。あんたに褒められても嬉しくない！」

「つれないなあ。俺たちは裸の付き合いもしてきた仲間じゃないか
…。」

嘉月は目元を押さえる仕草をするが、
それが当然嘘泣きだということはわかっている。

「誤解するようなこと言わないで！
まだ自我も芽生えていない子供の頃の話でしょ！」

紗和と嘉月は切っても切れない腐れ縁…、つまり幼馴染なのだ。

「幼馴染に対して冷た過ぎない？」

「あんた、幼馴染を“とても仲が良い”という意味に捉えてない？」

「そうでしょ。」

「違う！」

首を傾げる嘉月に、紗和は指をビシッと指す。

「いい？ “幼馴染” という言葉を私が辞書で引いてみたところ、
“子供の頃に親しくしていたこと” だと書いてた。」

「まあ、そうだろうね。実際昔から仲が良かったじゃない？」

「はい。違います。“子供の頃” は私が親しくしてあげていただけ
で、

今は親しくもないし、もちろん仲良くもないから。
そこ間違えないで！」

あくまでも、紗和は昔親しくして“やった” だけで、
今はなんでもないと強調する。

「ねえ、何でそんなに俺の事を目の敵みたいにするの？」

更に嘉月は首を傾げる。

黒いサラサラな髪も一緒に揺れる。

紗和が嘉月を嫌う理由その一が、“男のクセに自分よりも美人なひと”だ。

目はくっきり二重で鼻も高く、艶やかな唇……。それに加えて、肌もきれいで髪もサラサラときた。

昔から、嘉月と一緒にいると、

「嘉月ちゃんは本当にかわいいわね。……あっ紗和ちゃん“も”かわいいわね。」と、

女である紗和は後付けのような扱いをされるのに対し、

嘉月はいつも可愛い、可愛いと言われてきた。

最初は自分も可愛いと言われたいがために、

嘉月に対抗していたが（勝手に対抗意識を燃やしていただけ）、それも限界があることを知った。

小さい頃可愛かった子供は、
きっと大きくなるにつれてブサイクになるだろうと思っていたが、
嘉月は紗和の予想を大いに裏切って、すくすくとイケメンへと育っ
ていった。

なら、“イケメンでも太ってしまえばいいじゃないか！”と思い、
毎日高カロリーのお菓子を作ってあげていたこともあったが、
横に大きくなるどころか、縦に大きくなってしまい、
余計にイケメンが際立ってしまうという結果に終わった…。

じゃあ、“勉強で対抗してやる！”ということで、
試験で果敢に嘉月に挑んでいるが（勝手に）、
世の中には顔も良ければ頭も良い人間もいるらしい…。

これが嘉月を嫌いな理由その二：“頭が良くてムカつく”だ。

挑み続けて早10数年…。
未だに勝利を収められずにいる。

もはや、最初の対抗心とはずいぶんとそれているが、
紗和はどうしても嘉月に一度でもいいから勝ちたいのだ。

ただのひがみだと言われてもかまわない。

“ そうだ！ ひがんで何が悪い！！ ” といったように、
とっくに開き直っているのだ。

「とにかく、あんたの全てが私は気に食わないの！」

「へえ…。」

紗和はふんつと顔をそむける。
まだ、嫌いな理由があるが…。

顔をそむけた紗和に、嘉月は怒ることなどせず、そのまま接近してくる。

「ちよっ、ちよっ…。」

焦る紗和をじりじりと壁際に追い詰めていく。

まるで獲物を見つけたハンターのように、逃げられないように目で捕える。

紗和は後ろに下がっていったが、足が壁に当たってしまい、そこが行き止まりであることを知る。

後ろに逃げられないなら、横に逃げればいいのだが、嘉月が壁に両腕について逃げられない。

完全に彼の腕という檻の中に閉じ込められてしまった。

「かつ、嘉月…。ちっ、近…。」

この状態でも、結構な密着度なのに、更に嘉月は顔を近づけてくる。

「俺のこと、なんとも思っていないんでしょ？」

「そっ、そうだけど!？」

「じゃあ、逃げなくてもいいじゃない？」

背の高い嘉月は上から紗和を覗きこむように、見つめてくる。目を細めて、意地の悪い顔をしている。

「そんなに、近づかれたら、普通、逃げる、でしょ？」

身体が固まってしまつて、言葉もカタコトになる。

“…こういうことしてくるから嫌いなんだっての！！”

嘉月を嫌う理由その三…“必要以上の大接近をしてくること”。

話す時はなぜか顔を近づけてきたりして、紗和を狼狽させる。

しかし、今以上に接近されたことはこれまでになかった…はずだ。きっと、紗和をからかって楽しんでいるに違いない。

「違うなあ。紗和が逃げるから、俺は追いかけたくなるんだ。」

「逃げてな…」

“逃げてなんかない”と言おうとしたら、耳元に顔を寄せられて、その言葉は途切れた。

「ああ、そっか。紗和が俺を追いかけてるんだっけ？」

吐息交じりに囁かれて、思わず身体がびくっとなる。

「早く捕まえてくれないと、俺が捕まえ」

「うきゃ〜〜！！」

ここが我慢の限界だった。

後半に嘉月が言ったことは一言も頭に入ってこなかった。タツクルするように嘉月を押しつける。

「あんたをセクハラで訴える!!」

「こんなのがセクハラなら、

この瞬間に一体何人の男が訴えられるんだろうねえ？裁判所は大忙しだよ。」

動揺しまくりの紗和とは違い、嘉月はひょうひょうとしている。まさに、つかみどころがない。

自分一人だけが、焦って動揺しているのがバカみたいだ……。

第1話 完璧な幼馴染（後書き）

同時に「Epimedium Grandiflorum」という作品も掲載していますので、よろしければそちらの方も見てみてください。どちらかを連載にするつもりなので、場合によってはこちらら一度、閲覧除外にさせていただきます。

第2話 賭け

「お取り込み中悪いんだけど…。

紗和ちゃん、ここ学校の廊下だって忘れてない？ ついでに、私の存在も…。」

二人が攻防を繰り返している間に、香代子の声が割り込んでくる。
…そこで、はたと紗和は気付く。

“しまった…！ここ学校じゃん！？”

周りを見ると、同じ学年の生徒達が一斉に目をそらす。
まるで、見てはいけないものでも見てしまったかのような反応だ。
そして、一斉に四方に散らばっていつてしまった。

「ちょっと、嘉月！あんたのせいになんか変な空気になったじゃないのー！！」

「えっ？俺のせいなの？？」

本をただせば、紗和が嘉月に街中のヤンキーのように絡んだのが原因だが…。
自分に非があるとは全く思っていないようだ。

「もう、いいや。香代子帰ろう！」

「はい。」

今は放課後で、帰りがけに試験の結果発表を見に来たのである。
腑に落ちないが、順位もわかったのでここにはもはや用もない。
さっさと帰るのは当然だ。

香代子と帰ろうとしたところで、「紗和」と嘉月に呼ばれた。

「なに？」

「確か、来週は実力テストがあったよね？」

「…そうだけど。」

だからなんだと言わんばかりの顔をする。

試験の予定表はあらかじめ配布されているので、
紗和に聞かなくても自分のプリントで確認すればいいはずだ。

「いつも、紗和から勝手に勝負を挑まれているなんて、理不尽だと思わない？」

嘉月は腕を組んで、壁に寄り掛かる。
紗和にとっては、長い腕と長い足を自慢しているようにしか見えない。

「…何が言いたいわけ？」

「君は俺に勝てたらそれでいいかもしれないけど、
俺は紗和に勝ってもなんのメリットもないじゃないか？」

嘉月の言うことは実に正しい。

紗和が勝手に挑んでいるこの勝負に、嘉月は巻き込まれているだけなのだから。

「それはそうよね」と香代子が相づちを打つ。

「だから、次のテストは賭けにしない？」

「賭け？」

めずらしい…。

嘉月からテストの勝負に乗り気だなんて…。

もしかしたら、何か裏があるのかもしれないと、紗和は探りを入れる。

「どうして、急にそんなこと言うのよ…。なんか企んでんの？」

「心外だなあ。紗和のために想って言ってるのに。」

「私のため？」

ますます、嘉月の意図がわからない。
賭けにしたら、なぜ紗和のためになるのだろうか？

「もし、紗和が俺に勝ったら何でも言うこと聞いてあげる。」

「なんでも…？」

「そう。何でもね。俺のこと好きにしていよ。」

この嘉月に何でも命令できるということだ。

“…つまり、こいつをパシリにして購買にパンを買いに行かせたり
できるってこと？

それに、秋葉原の某アイドルグループのものまねさせたりとか…？？
何ソレ！超楽しいじゃん！！”

紗和の発想は貧困なものだが、嘉月の提案に乗り気になっている。

「いいわよ、賭けにしようじゃない！
あんたには完コピしてもらうから。せいぜい今から練習しておくこ
とねっ！！」

どうやら、嘉月にさせることが決まったようだ。

「完コピ？練習？？」

…よくわからないけど、紗和が乗り気ならそれでいいよ。
目標があるほうが、勉強にも身が入るでしょ？？」

「今度こそ、あんたをひれ伏してやるから。」

早くも、紗和は自分が勝つことを前提に考えている。
非常に単純な性格だ。

「…でも、逆も然りだよ？」

「私が嘉月に負けたらってことでしょう？
上等よ！何でも言うこと聞いてやるわっ！！」

「じゃあ、契約は成立したってことだね。」

「女に二言はないっ！」

壁にもたれていた身体を起こして、嘉月は紗和の前に立つ。
妙な威圧感を感じる…。

二人の身長差だけではない、威圧感を……。

「楽しみだなあ。」

ねえ、紗和？ 約束は絶対だからね？」

嘉月は、紗和に顔を近づけて再度確認する。
いちいち顔を近付くのが腹立つが、「わかってる」と紗和は返す。

「覚悟しといてよ…。俺は手なんて絶対に抜かないから。
逃げられるとは思わないでね？」

嘉月は、ニヤリと気味悪く笑う。

まさに、悪魔の微笑み…。

紗和は顔が引きつる。

こういう笑い方をするときの嘉月はろくなことを考えていない。
これまでの経験からして、容易に予測できる…。

もし負けてしまったら、非常によろしくない展開になるだろうと…
…。

そんな二人を見て、「やっぱり、二人は仲良いよね。」と香代子はつぶやいた。

決戦の日まであと1週間…。

紗和の勉強漬けの日々が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0540y/>

計画的レンアイ

2011年11月13日14時57分発行